

奈良 いのちの電話

2021
春
第384号

特集 すべての子どもを笑顔に

松島 靖朗 氏

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp



合鹿碗
ごうかくわん

塗師

樽井宏幸

飯のあたたかさ手より手へわたされたり

種田山頭火

風鐸



私は現在、専門学校の鉄道システム学科で教えています。学んでいる学生は将来、列車の乗務員や鉄道の保守の仕事に就きます。

数年前、白浜に旅行する機会が有りましたが、太平洋を一望し車窓の景色を楽しんでいる時に、特急列車が下から突き上げられるように揺れ、脱線するのではないかと不安を感じて怖かった思いをしました。他の乗客の人々は何事も感じなかったのでしょうか？後日、学校で鉄道工学の先生に伺いますと、保線の不具合で起こるという話です。

線路に敷いてある石はバラストといいますが、バラストの役割は、踏切などで線路の

様子を観察してみると分かります。列車が通過するとき、線路がぐっと沈み込むように見えるはずですが、硬そうな鉄のレールが、列車の重みで下にゆがむ。バラストは、その荷重を支える役目をしています。つまり、バラストは線路のクッションになっているわけです。また、石を積み上げた構造は水はけを良くする。レールは鉄だから錆びやすいし、木製の枕木は水に長時間浸されると腐りやすい。バラストのおかげで線路と枕木は腐食しにくくなっているともいえます。だから、岩石をわざわざ砕いて敷いています。ちなみに石を積み高さにも規定がありまして、JRの場合は新幹線が30cm、在来線の幹線が25cm、在来線の支線が20cmとなっているそうです。

バラストが厚いほど重い列車や速い列車に耐えられます。しかし、バラストを厚く

するほど材料や設置時間が増えて費用が増える。だから、重量級の列車が走る幹線は厚め、ローカル線では薄めに敷いてあります。もちろん、ローカル線であっても、重量級の貨物列車を運行する路線では厚めに敷いてあるそうです。バラストがないとどうなるかという、列車の荷重が地面に直接伝わって地面を破壊し、そのうちに線路自体が沈下してしまい、乗り心地も悪くなり、地面が硬い場合は列車の衝撃が反力となって戻ってくるので、車体がゴツゴツと突き上げられるそうです。

バラストは素人目には石ころにすぎませんが重要な役割をしていることを知らされました。いのちの電話の相談員の方も、いろんな研修を受けられて「バラスト」の厚みを厚くされているのではないかと考えています。(雅)

寄り添い人を訪ねて VI

すべての子どもを笑顔に

認定 NPO 法人おてらおやつクラブ代表理事 松島 靖朗 氏



松島 靖朗 (まつしま せいろう) 氏
プロフィール

安養寺 (田原本町) 住職。1975年生まれ。奈良市立一条高校外国語科・早稲田大学商学部卒。NTT DATA など一般企業での社会人経験を経て、2010年浄土宗僧侶に。2017年 NPO 法人おてらおやつクラブを起業、第8回奈良人権文化選奨・第6回奈良日賞受賞。2020年認定 NPO 法人化。

た団体に連絡をとりお寺の供物を「おすそわけ」させてもらうようになりました。

おてらおやつクラブという名前

この活動は、初めは私一人で始めたものでした。しかしある時、「おすそわけ」を届けていた団体の代表の方から「おそなえを頂いて助かっています。けれど、まだまだ必要としている方はたくさんいて、足りていないんです。」という言葉をいただき、子どもの貧困問題の深刻さに気がつかされたのです。自分一人だけではどうすることもできない問題に取り組むには、仲間が必要だと感じ、信頼できる仲間のお坊さんに声をかけ2014年に「おてらおやつクラブ」を立ち上げました。子どもたちにお寺にお供えされたまごころのこもったお菓子などを届けるから「おてらおやつ」、多くの人々が関わって笑顔でクラブ活動のように取り組みを続けていけたら、という願いを込め「おてらおやつクラブ」と名付けました。

たくさんの方がこの活動に心を寄せてくださるなかで、「おてらおやつクラブ」という名前には深い意味があることに気付かされました。「おてら」は仏さま、ご先祖さまをおまつりする〈仏〉がある場所、「おやつ」は仏さまの教え、つまり〈法〉を味わう場所、「クラブ」は実践する仲間たち〈僧〉が集まり修行するところ、というような意味があります。この〈仏・法・僧 (ぶつぽうそう)〉というのは「三宝 (さんぼう)」と呼ばれ、仏教でもっとも尊ぶべき三つの要素です。おてらおやつクラブは現代的な社会問題を解決するために「お寺が新しく始めた活動」と捉えられることがあるのですが、実は昔から全国のお寺で大切にされてきた〈仏・法・僧〉を敬うという習慣と社会の課題をつなげる NPO 法人の活動でもあるのです。

日本の貧困問題の課題

日本の貧困の多くのケースは相対的貧困と呼ばれるもので、その国の経済的な水準の中で比較した時にいわゆる標準とされるような生活が享受できない状況のことを指します。しかし見かけでは経済的な困難を抱えているのか否かが分かりにくいのが実際のところ。この「見えにくさ」が日本の貧困問題の大きな課題です。講演などで、「この飽食の時代に、貧困家庭なんて本当にあるんですか」と質問されて愕

認定 NPO 法人「おてらおやつクラブ」とは

2014年奈良安養寺の住職松島靖朗さんが発起人となりスタート。お寺にお供えされる「おそなえ」を仏さまからの「おさがり」として頂戴し、「おすそわけ」として、経済的に困難な状況にある家庭の子どもたちのもとへ届けている。子ども食堂、児童養護施設、社会福祉協議会、自立援助ホームなど約500団体と、全国約1,600のお寺をつなげ、それぞれの団体の活動を通じてお菓子や果物、食品や日用品などをおすそわけしている。(2021年3月現在)

今回の「寄り添い人を訪ねて」は、子どもの貧困が社会問題化する中で、「おてらおやつクラブ」という活動で子どもたちに寄り添っておられる松島靖朗氏に、広報誌初のリモートでお話を伺いました。以下は松島代表理事のお話をまとめてさせていただいたものです。

日本にも貧困問題がある

2013年5月大阪天満のマンションの一室で母子が餓死状態で発見される事件が起きました。その新聞記事を読んだ時、この飽食の時代に、大阪で母子が餓死したという事実に大きなショックを受けました。この年は長男が生まれて、父親になった年でもあり、生活圏が近い大阪で、お母さんと息子さんが餓死状態で発見されるというこの事件が、「他人事」ではなく「自分事」のように感じられました。一方でお寺にはお供え、食べ物がたくさん集まってくる、子どもたちのおやつになるお菓子もある。お寺のお供えを子どもたちに届けることはできないか、自分にも何かできることはないか、二度とこんな悲劇があってはならない、何かしなければ、動き出そうという気持ちになって、記事で紹介されてい

然とすることもあります。見えにくいから助けの手が伸びにくい。

また、困りごとを抱えている人たちはなかなか「助けて」と声をあげることが困難です。困窮家庭、ひとり親家庭の特にお母さんに対して、「身勝手に結婚して、離婚して・・・それはあなたの責任でしょう」というような自己責任論が、社会には根深くあるように思います。だから背景にある貧困問題を共通認識として持つことが難しいとも言えます。見えにくいから人は無関心になってしまいます。私たちは、困難に直面しているひとり親世帯の方々の声にしっかり耳を傾け、「日本の中に子どもの貧困問題という、次世代に残すと不都合な課題がある」ということを多くの人々に啓発していくということも大きな役目だと思っています。

おてらおやつクラブの原動力

大阪の母子餓死事件のような悲劇を二度と起こしてはいいないという思いがあります。未来の子どもたちにこんな社会を残したくないという強い気持ちもあります。私自身お寺の生まれでありながらお寺にすることに息苦しさを覚え、一度は外に出たこともありました。紆余曲折を経ながらも今このように仏さまに仕える活動をしているのは、多くの方のご縁に支えられてのことです。今では、「自分は仏さまやお寺に心を寄せてくださる大勢の檀家さまからの「お仏飯」や、これまで出会ってきた多くの方々からの薫陶で育ててもらったのだ」と改めて感じています。私自身が受けたたくさんのご縁やご恩を、自分のところで止めることなく他のの方々へと手渡していき、誰もが生まれた場所を問わずに笑顔で暮らせる社会が実現できたらと願いながら活動を続けています。

コロナ禍での活動

昨年2月末、新型コロナウイルスの影響で小中学校が一斉休校になった頃から、全国のお母さんたちの助けての声が直接事務局にたくさん届くようになりました。休校になり給食が出ず食費が余分にかかったり、子どもさんが家にいることで光熱水費が普段以上にかかったりと家計が圧迫されたことが大きな要因です。信号機で言えば、黄色信号で踏みとどまっていた多くのお母さんたちが、コロナ禍で一気に赤信号になってしまったのです。いつ大阪の悲劇が起こってもおかしくない状況が今でも続いています。支援しているご家庭の数は、2020年3月の約350世帯から、今年2021年2月時点で約1,500世帯に急増しました。中にはケースワーカーの必要と思われる状況の家庭もあり、行政への橋渡しをするための専門的な知識をもったスタッフも必要です。

ありがたいことに、困っている方々を助けたい「寄付・寄贈をしたい」という声も増えました。「みんなが困っている時だからこそ」と優しい気持ちを寄せてくださるたくさんの方々のご寄付やご寄贈のおかげで、コロナ下においても支援活動ができています。お力添えして下さる方々に心から励まされるとともに、しっかりとお気持ちを受け取り、必

要な方へとつなげていかねばならない思いを新たにしています。

子どもやお母さんからの声

おやつを受け取った子どもたちから手紙をもらうことがあります。小学校低学年と思われるお子さんからこんな印象的なお手紙をいただきました——「お坊さん、和菓子はもういいのでポテトチップスを送ってください」。いろいろ我慢しながら生活をする中で子どもらしい姿を見せてくれたことが、心から嬉しかったです。貧困問題の解決はまだまだ遠い道のりですが、そういう子どもの変化が私たちの活動の成果と言えます。

お母さんから感謝の言葉とともに「孤立した自分たちを会ったこともない人たちが見守ってくれているのがありがたいです」とメッセージが送られてきたこともあります。

支援して下さる方からの声もあります。身体の不自由な方がオンラインゲームでお菓子を集めて、おてらおやつクラブに寄贈してくれたり、年配の方が遺産を受け取ってくれる人がいないので、自分の遺産で少しずつ支援したいと申し出てくれたり、支援できる場所を作ってくれてありがとうという声もあります。

様々なご縁に私たちの活動は支えられています。

おてらおやつクラブのこれから

現在は全国約1,600か寺が参加し、約22,000人の子どもに「おそなえもの」を「おすそわけ」しています。これを全国31万世帯ともいわれる困窮するひとり親家庭に届けていくことが目標です。大きな目標ですが、必ず出来ると信じています。一人ひとりの力は小さいかもしれないけれど集まれば大きな力になるのです。

「貧困」というのは二つの要素から成り立っています。「貧」は経済的な問題、「困」というのは困りごとを抱えているということです。人は誰でも困りごとを抱えています。けれど孤立していて、それを解決する糸口を見つけ出すことが難しい、周りに助けてと言えない人がいます。「助けて」と言える社会、助け合える社会をつくるのが私たちの活動のゴールです。

国内の貧困問題は課題が大きくて難題だらけですけれども、お寺という場所は長期戦が得意です。その地域で何百年も歴史があって、その地域の支えとなってきた場所ですから、いよいよ全国のお寺の出番です。地域で支え合う社会をみなさんと作っていかれたらと思っています。

認定NPO法人 おてらおやつクラブ

〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾40 安養寺内

■ info@otera-oyatu.club

■ FAX 050-3488-0963

■ 郵便振替 14590-25775631